

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲 第 号
------	--------

氏 名 張 ユリ
論文題目

1930年代の帝国日本におけるモダニズムの諸様相
——空間・メディア・植民地——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田祐子
委員	名古屋大学	教授	池内敏
委員	法政大学	教授	川村湊
委員	国際日本文化研究センター	教授	坪井秀人

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は「都市空間」「メディア」「植民地」という3つの観点から、1930年代における日本および朝鮮半島のモダニズム文学・文化を考察したものである。序章と終章を別にして、全8章、3部によって構成されており、この中には学術雑誌に掲載された査読付き論文が4篇含まれている。

第1部「モダニズム小説における都市空間表象」では、堀辰雄をはじめとしたモダニズム小説に現れた都市空間のあり方を分析している。第1章では短篇小説のアンソロジー『モダン TOKIO 円舞曲』に描かれた東京を分析し、大衆が受動的な享受者から、体験する主体へと変化したありさまを考察している。また銀座や新宿などのような、いわゆる盛り場ではなかった丸の内という場所が、1930年代の東京の中心として浮上してきた様相を捉えている。第2章では堀辰雄文学に見られる東京と軽井沢の表象を比較検討し、短篇「聖家族」の発表前後に見られる東京という土地から離れていく堀の指向と、東京でも軽井沢でもない第三の空間が発見されるという事実とに着目している。これによって、近代都市東京を描いた1930年代前半の初期作品から、『風立ちぬ』に代表される1930年代後半の軽井沢文学へとという堀辰雄作品の移行の様相を明らかにしている。

第2部「雑誌メディアとモダン文化」では雑誌メディアがいかにもダン文化を牽引していたかを、「モダン」系雑誌の分析を通じて読み取っている。第3章では「モダン」系雑誌の代表格である『モダン日本』について、視覚イメージを用いた他の企業との連携のありさまと、「モダン日本クラブ」の企画に見られる読者組織の仕組みについて分析している。第4章では「エロ・グロ・ナンセンス」に代表されるモダン文化の中で、表現の客体とされながら同時にその主体でもあった女性文学者について、「モダン」系雑誌の誌面に登場する女性文学者像と、女性文学者自身による作品とを比較しながら論じている。第5章ではモダニズムの最盛期にモダン文化を牽引していた雑誌『モダン日本』が、日中戦争を境に日本の戦争および植民地政策を積極的に宣伝する編集体制に変貌していく過程について検討している。

第3部「植民地朝鮮青年とモダニズム」では植民地朝鮮におけるモダニズムについて、朝鮮の青年作家が経験した都市と、彼らの文学に現れている都市空間表象とを分析している。第6章では朴泰遠（パク・テウォン）の「小説家仇甫氏の日」と堀辰雄の「不器用な天使」を、遊歩者という観点から分析し、植民地青年が抱いていた東京への憧憬と彼が感じていた限界について検証している。第7章では林和（イム・ファ）と李箱（イ・サン）の東京経験をそれぞれの作品の表現から検討し、植民地青年の東京経験の多様な様相について論じている。第8章では『モダン日本』の編集者・馬海松が自由主義者から国家主義者になる過程を、敵の認識による国家観形成という観点から考察している。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

1930年代のモダニズム文学については、かねてからその国境を越えた同時代的展開に注目が集まり、研究が進められてきた。本研究の企図も、そうした越境的なモダニズム文化の広がりを研究しようとしたものである。

本論文のもっとも優れた達成は、第3部を中心に展開された、日本のモダニズム文学・文化と朝鮮半島出身の文学者たちの活動との交渉の考察にあり、審査委員の評価もここに集中した。韓国語、日本語の両者に堪能である利点を生かしながら、堀辰雄をはじめとした日本の文学者、林和や李箱ら朝鮮半島出身の文学者、モダニズム雑誌や短篇小説アンソロジーを横断的に分析していくその手法は、まさに一つの国家の内側では収まりきれないモダニズムという文化の展開のありさまをとらえるにふさわしいものであったといえよう。

とりわけ、日本と朝鮮半島とに跨がって活躍した文学者であり編集者である馬海松に着目し、1945年という大きな転換点を跨いで変容した彼の思想的軌跡を粘り強く追いかけた第8章、また彼の編集による雑誌『モダン日本』の編集戦略を細密に分析した第3、5章は、本論文の優れた達成と評価できよう。

さらに、文学作品の中に見られる空間の表現に着目したことも、本論文の特長となっている。堀辰雄によるいくつかの小説を検討しながら、軽井沢と東京、そして第三の空間の出現について考察した第2章、堀辰雄と朴泰遠の作品を扱いながら、モダニズム期の東京とソウル（京城）という二つの大都市の描かれ方を分析した第6章、新興芸術派作家12人による短篇競作『モダン TOKIO 円舞曲』に描かれた東京の姿を追いかけた第1章は、文学研究の範囲にとどまらない成果となっている。

ただし、横断的な本研究の手法は、同時に弱点ともなっている。小説家、メディア、編集者、雑誌、都市空間など幅広く見渡した本論文は、テーマ的な求心性が弱いという難点も持っているからである。このことについては審査委員からも、作品や作家の選択の必然性に関してや、「モダニズム」という概念の規定の仕方について、また「大衆」や「国民」という集団の把握のあり方について、より踏み込んだ議論を求める指摘があった。

とはいえ、求心性の弱さについては、本論文が用意している「空間」「メディア」「植民地」という鍵概念の導入によって補いえている部分も大きく、各概念の把握についても改善の余地はあるものの、いずれも本論文の価値を大きく損なうものとはなっていない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。